

基本高水の選択について

基本高水選択専門部会は5月28日午前10時から午後9時まで、延べ11時間にわたって「ひょうご共済会館」にて開催し、6名の討議メンバーによって下記の通りの結論を得た。当日は、討議メンバーと進行役の委員長のほか、流域委員会の委員9名、計16名の委員が出席したほか、県から6名、流域市から1名（伊丹市）およびコンサルタントの建設技術研究所のスタッフ3名が出席した。

基本高水の選択について、最終的に集約したのは、次の通りである。

1. H16年10月の台風23号による洪水は、直近に起きた大洪水であり、武庫川における既往最大の洪水でもある。この洪水は全国的に異常降雨による未曾有の洪水が多発した年に発生したものであり、この洪水をもたらした降雨は今後の異常気象等に伴う異常な降雨パターンの一つであるとも考えられる。この降雨パターン（時間分布、地域分布）に基づく引き伸ばし降雨は、対象降雨としての最終的な選択肢を検討する過程で、いったんは「時間分布」の棄却基準によって棄却されたが、その後、H16年実績降雨による洪水が既往最大であること、また国交省河川砂防技術基準の「既往降雨の選定では、大洪水をもたらした降雨を落とさないように注意しなければならない」の記述も考慮して、「H16年型の引き伸ばし降雨」が棄却基準を満たすよう時間分布に最小限の修正を加えたうえで、対象降雨として採用した。この修正方法は、国交省の技術基準に記載されている処理法にも合致しており、不適切な修正ではないとの認識で一致した。

そのうえで、基本高水の選択の力点を「流域、特に基準点下流域の洪水に対する安全と、そのための洪水防御計画の目標値の選択」に置き、H16年型降雨によるピーク流量 $4651\text{ m}^3/\text{s}$ を採用した。

2. 専門部会では、H16年のピーク流量 $4651\text{ m}^3/\text{s}$ の年超過確率を流量確率の算定結果を用いて検証し、ピーク流量 $4651\text{ m}^3/\text{s}$ は1/100確率流量の上限値に近いものであるが、安全の観点からこの流量を採用した。
3. 天井川になっている武庫川の下流域の安全を考えるならば、既往最大洪水をもたらしたH16年の降雨パターンを1/100確率規模に引き伸ばした降雨から算定された流量 $4651\text{ m}^3/\text{s}$ は、流域住民にも納得できる数値である。
4. 基本高水を大きい方の数値である $4651\text{ m}^3/\text{s}$ を採用しても、それに対応した治水対策は安易に新規ダムに直結するのではなく、新規ダムなしで対策をおこなえるよう努力する。すでに「30年間の整備計画では新規ダムを位置づけない」方向でとりまとめを議論しており、基本方針でも流域対策と河道対策で対応できないものは新規ダムも選択肢の対象の一つとした「洪水調節施設」で対応する。その際は、新規ダム代替施設を優先して検討するとともに、将来次の整備計画を策定する際にも、住民意思を反映させる仕組みを保障する。
5. 大きなピーク流量の基本高水を採用すれば、ピーク流量は小さいけれども洪水継続時間は長いというハイドログラフが治水対策の検討過程で取り上げられないことも懸念される。破堤の危険性評価や堤防強化対策の検討では、継続時間の長い洪水の方が危険側にある洪水のタイプと考えられるので、今後の具体的な治水対策の検討では、洪水継続時間の視点からの考察も重要である。

以上